

広島県北広島町小見谷製鉄遺跡群の測量調査報告 (3)

— 鑪ヶ谷^{たたら}第1号製鉄遺跡, カミショウブ第1号製鉄遺跡 —

A Report of the Research on a Topographical Survey of Komitani Iron Smelting Sites (3)

— Tataragatani No.1 Iron Smelting Site, Kamishobu No.1 Iron Smelting Site —

安間 拓巳

Takumi AMMA

現代文化学部言語文化学科日本語文化コース考古学研究室では、毎年学生への教育活動や地元への地域貢献活動として、考古学の野外調査を実施している。今回は、2011（平成23）年から継続している、広島県北広島町小見谷製鉄遺跡群での地形測量調査の成果を報告する。

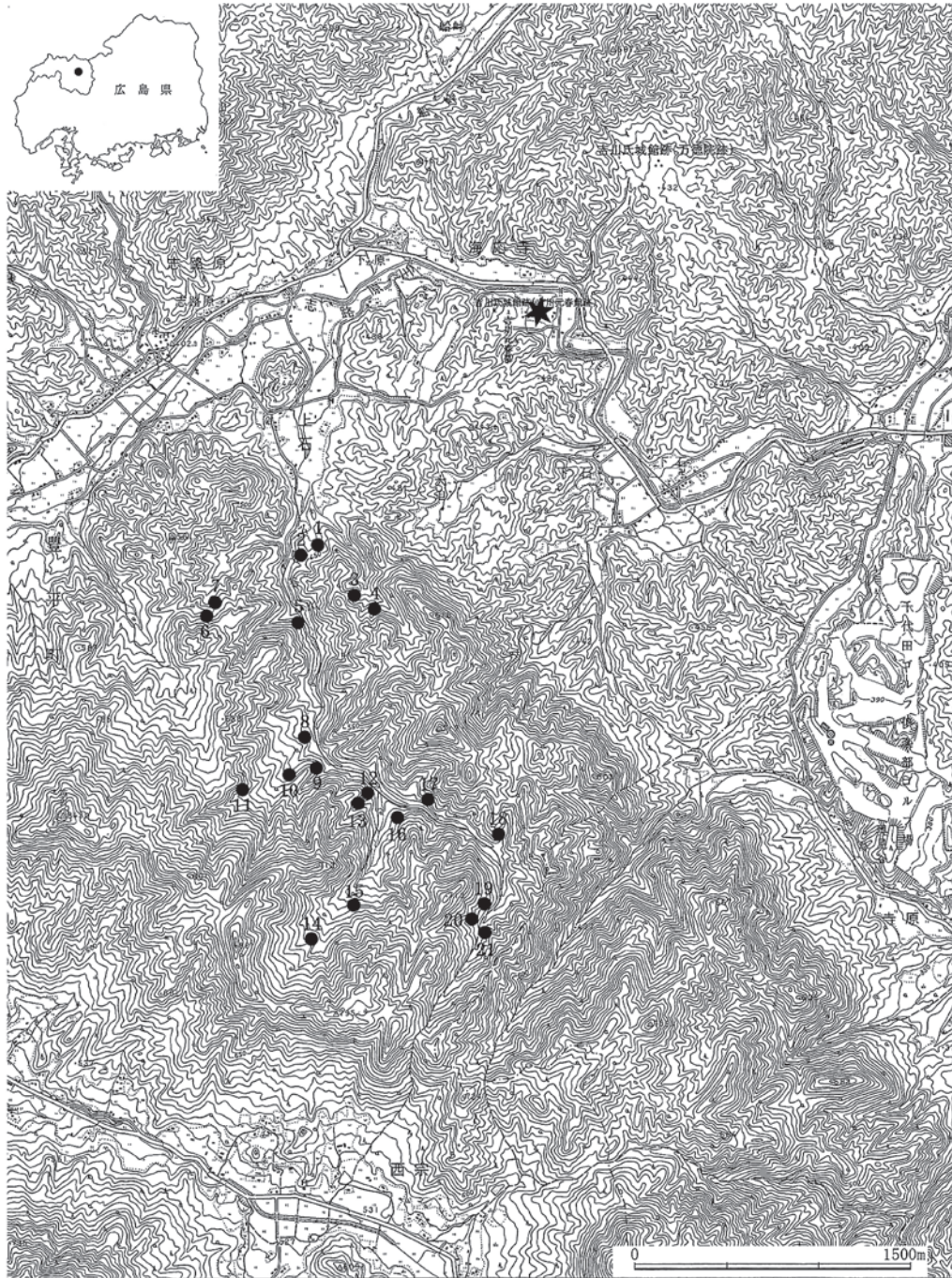
北広島町域は、中世に盛んに鉄を生産していた地域で、小見谷製鉄遺跡群も中世製鉄遺跡の一つである。遺跡群は、国指定史跡である吉川元春館跡の近隣に位置しており、館の建設には本地域で生産された鉄が使用された可能性も指摘されている。このことから、本遺跡群は北広島町の中世の歴史を考えるうえで重要な遺跡であり、継続した調査研究が望まれる。また、地元の方々からは、遺跡の基礎資料を作成してほしいという強い要望があり、調査の成果を公表することで、地域貢献の役割も果たせるものと考えている。

今回は、鑪ヶ谷第1号製鉄遺跡とカミショウブ第1号製鉄遺跡について、概要を報告する。

はじめに

広島県北西部（安芸北部・芸北地域）では、文献史料や考古学的調査などから、中世に盛んに鉄生産の行われたことが知られている。なかでも山県郡北広島町の旧豊平町域では、これまでに製鉄関連遺跡が220ヶ所以上確認されている。そして、そのほとんどが遺跡立地の特徴や、近世初期に広島湾に注ぐ太田川上流域での砂鉄採取が禁止されていることなどから、中世に属するものと考えられている（小都2008）。ところが、この地域でこれまでに発掘調査や地形測量調査が行われて、具体的な状況の判明する遺跡は十指にも満たず、中世の旧豊平町域、さらには安芸北部で行われていた鉄生産の様相を明らかにするには、甚だ不十分な状況が続いている。

こうした中、現代文化学部言語文化学科日本語文化コース考古学研究室では、2011（平成23）年より旧豊平町域にある小見谷製鉄遺跡群の調査をする機会を得、遺跡の現状確認と地形測量調査を行っており、現在も継続中である。地形測量調査を実施した遺跡については、順次本紀要において調査概要を報告してきた（安間2016・2017）。今回は、平成28・29年度に調査を実施した、鑪ヶ谷第1号製鉄遺跡とカミショウブ第1号製鉄遺跡について報告する。なお、考古学研究室で実施している野外調査の概要や取り組みについては、本紀要第21号で報告している（安間2015a）。あわせてご一読いただけると幸いである。



第1図 小見谷製鉄遺跡群分布図 (1:25,000「志路原」)

- 1 カミショウブ第2号製鉄遺跡, 2 カミショウブ第1号製鉄遺跡, 3 弓ヶ谷第1号製鉄遺跡, 4 弓ヶ谷第2号製鉄遺跡, 5 水釜迫製鉄遺跡, 6 平六第1号製鉄遺跡, 7 平六第2号製鉄遺跡, 8 原釜製鉄遺跡, 9 鐘ヶ谷第1号製鉄遺跡, 10 鐘ヶ谷第1号炭窯跡, 11 空山製鉄遺跡, 12 鐘ヶ谷第2号炭窯跡, 13 鐘ヶ谷第2号製鉄遺跡, 14 大草第1号製鉄遺跡, 15 大草第2号製鉄遺跡, 16 大草第3号製鉄遺跡・炭窯跡, 17 滝谷製鉄遺跡, 18 シアン製鉄遺跡, 19 小見谷第1号製鉄遺跡, 20 小見谷第2号製鉄遺跡, 21 小見谷第3号製鉄遺跡, 星印は吉川元春館跡

なお本報告は、平成28・29年度に比治山大学から交付された、比治山大学学内研究助成費の成果の一部である。大学当局には、記して感謝申し上げる。

1. 調査に至るまでの経緯

小見谷製鉄遺跡群は、広島県教育委員会が中世城館遺跡保存整備事業の一環として、1994（平成6）年から北広島町海応寺に所在する吉川元春館跡の発掘調査と遺跡整備事業を実施した際に本格的な分布調査が行われ、その様相が知られるようになった。また、遺跡群の発見に伴って、地元有志による小見谷遺跡保存会が結成され、断続的な分布調査と遺跡の維持・管理、遺跡群を活用した教育普及活動が行われてきた。しかし、学術的な基礎資料の作成はなされないままであった。

2010（平成22）年に、筆者は北広島町教育委員会の担当者より、小見谷製鉄遺跡群の存在と現状、地元保存会の活動についてご教示いただくとともに、保存会からの強い要望もあるので、地形測量図の作成などの基礎調査を行ってもらえないかと打診を受けた。その際、いくつかの遺跡の現地踏査を行ったところ、遺跡の遺存状態が非常に良いことや、遺跡の歴史的環境を考慮すると、本遺跡群は地域の歴史の解明や、広島県における中世製鉄遺跡の研究に重要な役割を果たしうる遺跡であり、早急に基礎資料を作成して公表する必要があると考え、調査の実施をお引き受けすることとした。

調査は、2011（平成23）年より北広島町教育委員会、戦国の庭歴史館（史跡吉川氏城館跡ガイダンス施設）、小見谷遺跡保存会のご支援・ご協力を受けながら実施している。

2. 遺跡の位置と歴史的環境

小見谷製鉄遺跡群は、広島県山県郡北広島町上石に所在する。町域内は、瀬戸内海に注ぐ太田川と、日本海に注ぐ江の川の源流域にあたり、中国山地の山々の間に、これらの河川により形成された沖積地が点在する地勢となっている。

遺跡群は、旧豊平町域に所在している。国史跡吉川元春館跡の西方約1kmの所で、江の川の支流の志路原川と合流する小見谷川の流域に、約3kmにわたって製鉄関連遺跡が点在している。遺跡群では、これまでに製鉄遺跡19ヶ所、炭窯跡と推定される遺構が数ヶ所確認されており、今後増える可能性がある。製鉄遺跡は遺跡立地の特徴や遺跡の状況から、ほぼすべてが中世段階のものと推定することができる。炭窯跡については、時期判断が難しいものが多いが、遺跡の現状などから、確実に中世に遡るとみてよいものも確認されている。

小見谷製鉄遺跡群や吉川元春館跡などが所在する上石・海応寺・下石の各地区は、中世末期には一括して「石之村」と呼ばれた地域と考えられ、ここに1583（天正11）年に吉川元春が長子の元長に家督を譲る際に建設した館が吉川元春館跡である。1591（天正19）年には、元長の後を継いだ広家が出雲の富田城へ移封されたため、館跡には元長の菩提寺である海応寺が建てられた。館跡周辺には、元春の妻の居所と伝えられる松本屋敷跡など、吉川氏に関連した遺跡や、中世の石之村に関わる地名が多く残されている。このうち、上石地区の小見谷川下流域には「鍛冶屋原」「和浪原」の地名が残るが、これらは吉川館建設に関わる古文書に見える「わなみのかち（和浪の鍛冶）」の居住地であった可能性が高く、こうした職人たちが、小見谷川の流域で生産された鉄から製品を製作したのではないかと推定されている（木村2001）。さらには、彼らが鉄生産も営んでいた可能性も考えられることから、文献史学と考古学の両方の分野から中世の製鉄・鍛冶職能集団の実情に迫り得る、重要な遺跡としてとらえることができる。また、分水嶺を南方へ越えた中原・西宗地区は、中世の巖島文書に見える、巖島神社へ鉄年貢を納めた山県郡三角野村にあたる地域と考えられている（田邊2007・福田1989）。

3. 地形測量調査報告

これまでに地形測量調査を実施した水釜迫製鉄遺跡、大草第3号製鉄遺跡・炭窯跡、鑪ヶ谷第2号製鉄遺跡、鑪ヶ谷第2号遺跡炭窯跡、滝谷製鉄遺跡については、本紀要第22・23号にて報告している(安間2016・2017)。今回はそれらに引き続き、鑪ヶ谷第1号製鉄遺跡とカミショウブ第1号製鉄遺跡について概要を報告する。

現地での作業は筆者の指導の下、現代文化学部言語文化学科の学生を中心に行っている。各遺跡の調査時期および調査参加者は、以下のとおりである。

【現地踏査ならびに地形測量調査参加者】

鑪ヶ谷第1号製鉄遺跡(2016〈平成28〉年8~9月調査)

参加者:小田侑右子・渡邊光恵・松田怜大・浦部絵恋・久保田 健・根本一輝

弓ヶ谷第1号製鉄遺跡・平六第1号製鉄遺跡(2017〈平成29〉年5月現地踏査)

参加者:東 七海・荒川梨那・上田梨乃・浦部絵恋・城本直也・中谷紀美佳

カミショウブ第1号製鉄遺跡(2017〈平成29〉年8月調査)

参加者:松田怜大・東 七海・上田梨乃・浦部絵恋・城本直也・中谷紀美佳・根本一輝・
寺田菜穂子

(1) 鑪ヶ谷第1号製鉄遺跡

志路原川との合流地点から小見谷川を約2.5km遡った地点の、川の西側に位置しているが、小見谷川には直接面してはいない。遺跡群全体からみれば、川の中流域に所在する遺跡である。現状は山林で、雑木などは少ないが、下草や落ち葉の堆積のため、地表面の観察がやや困難である。林道からは50~60mほど山林に入り込んだ位置にあり、後述するように、山道を通すときに廃滓場の一部が削られているため、林道から遺跡へと登っていく途中に、鉄滓等が散在している。遺跡の南方を小見谷川へ注ぐ沢が流れているが、製鉄作業面と推定される平坦面との距離が約30mあり、他の遺跡とは少し様相が異なる。沢との比高差は約5~6mである。

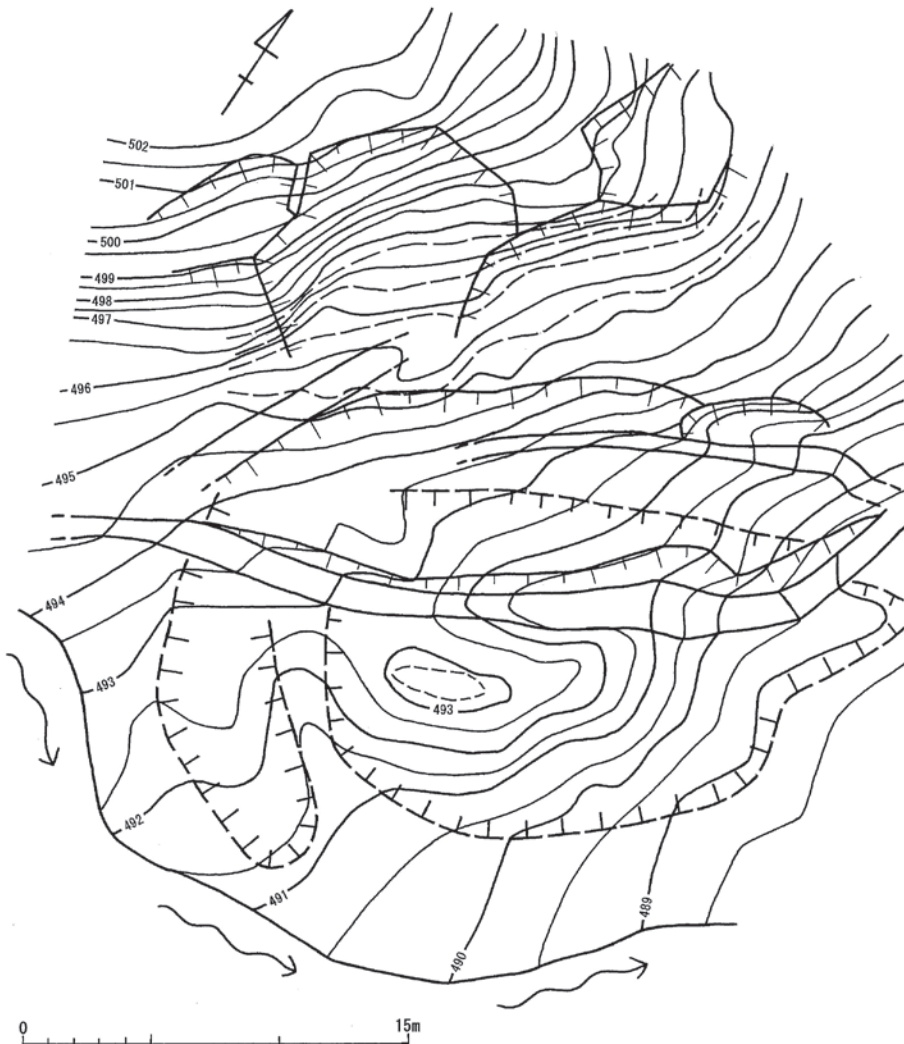
遺跡は、北東方向に伸びる尾根の先端付近の東側斜面を、幅約10m・高さ4~4.5mにわたって断面L字状にカットして、南東方向に向かって緩やかに傾斜する、製鉄作業場と考えられる平坦面をつくり出している。丘陵カット面は、かなりの急傾斜である。平坦面の標高は、およそ495.25~496.75mである。遺跡周辺には細い山道が何本か通っており、そのために地形改変を受けているようで、あまり遺存状況はよくない。

製鉄作業場と推定される平坦面は長さ約10m・幅約5mで、やや狭い印象を受ける。また、山側と谷側とで高低差があり、平坦面というよりは緩斜面に近い。平坦面の東端近くには、長さ約2.5m・幅約1.5m・高さ約0.5mの楕円形状に、周囲よりやや高い部分が認められる。これが本遺跡群に特徴的な、製鉄作業面上の高まりであるとも考えられるが、現在この部分には木が生えており、そのために土砂が溜まっている可能性もある。また、この辺りは細い山道のために地形が改変されているようで、製鉄作業場に関連した高まりであるかどうかの判断は難しい状況である。相対する、平坦面山側の丘陵カット面下部には、高まりは認められない。

製鉄作業場推定地の北側には、作業場推定地を切るように、もう一つ別の狭い平坦面が形成されている。長さ約9m・幅約3.5mで、山側には高さ約1.5mのカット面が認められ、地形としては中世製鉄遺跡の特徴と類似している。ただし、この平坦面の周辺には、現状では鉄滓や炉壁片などがほとんど散布していないため、製鉄作業場であったかどうかは判然としない。したがって、後世における何らかの土地利用の痕跡であることも考えられるが、製鉄に関連する遺構の可能性も考えておきたい。

製鉄作業により排出された鉄滓は、平坦面の東方約16mの所を中心に堆積している(第2図中の

「ト十」の範囲)。鉄滓が製鉄作業場（平坦面）下の斜面にはあまり見られず、山道を挟んだ、平坦面からやや離れた所にまとまって堆積しているのが特徴である。廃滓場は、現状では山道から沢に降りる通路状の部分により二ヶ所に分かれているが、元は一つのものであった可能性がある。通路南側の廃滓場は、北西から南東へ細長く伸びる形状で、長さ約10m・幅4～5m・高さ1～1.5mである。上面が平坦であることから、後世に削平された可能性が考えられる。通路北側の廃滓場は、北側に一部が流出しているが、おおよそ長さ15m前後・幅約8m・高さ3.5～4mの楕円形状である。ただし、西側を山道により削平されているので、元々の幅は10mを超えたものと推定される。いずれも、堆積土の中に鉄滓が含まれるという状況ではなく、鉄滓と土が混然として山をなしているような状態である。廃滓場の南東側から北東側にかけては平坦になっており、沢へと続いていく。現地での観察や地形測量図の検討から、製鉄作業に伴う排滓は、平坦面の南側（尾根のカット面を背にして見た場合の右手側）に主に廃棄されたものと考えられる。現地に残された廃滓の状況からは、製鉄作業面は狭いものの、盛んに製鉄作業が行われたことが推定される。



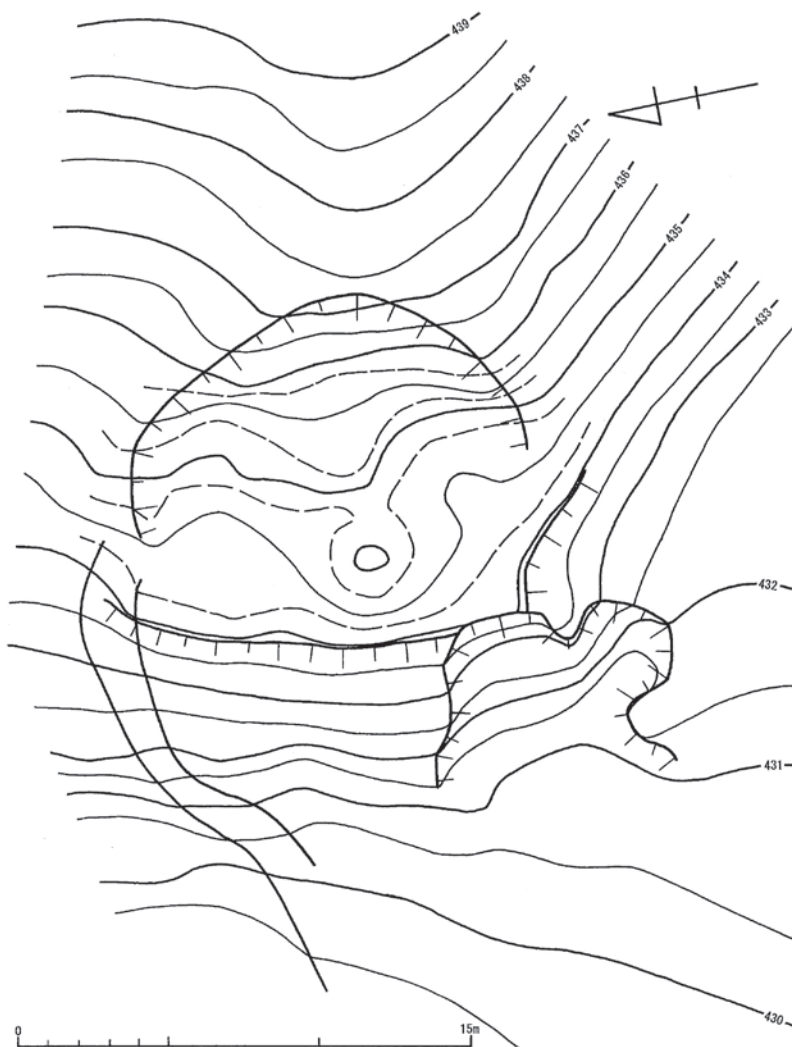
第2図 釜ヶ谷第1号製鉄遺跡地形測量図（実線は50cm、破線は25cm間隔。数字は標高〈m〉。）

製鉄作業場周辺には、他の遺跡で見られるような、炭窯跡かと思われるような窪みは認められない。丘陵カット面上部や、製鉄作業場の北側に平坦部をつくり出した地形が認められるが、製鉄遺構に伴うものかどうかは不明である。

(2) カミショウブ第1号製鉄遺跡

志路原川との合流地点から小見谷川を約1.2km遡った地点の、川の東側に位置しているが、小見谷川に直接面してはいない。遺跡群の中では最も下流域にあたり、谷筋の入り口付近に位置している。現状は山林で、雑木などは少ないが下草が多く、地表面観察はやや難しい。遺跡は林道から30mほど山中へ入った所にあり、遺跡の南側約15mのところ、細い水路のような沢が流れている。遺跡前面(西側)はかなり傾斜の緩い平坦面になっており、その面との比高差は3.5～4mである。

遺跡は西方に伸びる尾根の先端を幅約13m・高さ1.5mにわたって断面L字状にカットして、製鉄作業場と考えられる平坦面をつくり出している。平坦面は長さ約13m・幅は丘陵カット面の下部から8～9m、標高は434.25～434.75mである。遺跡のある尾根の両側は、谷部となる。



第3図 カミショウブ第1号製鉄遺跡地形測量図(実線は50cm, 破線は25cm間隔。数字は標高(m)。)

平坦面上には、高まりが東西に二ヶ所確認される。東側の高まりは、丘陵カット面下部のほぼ中央に位置し、長さ約3m・基部幅約4mの三角形または台形状を呈している。周囲の平坦部からの高さは、約1mである。上面は緩やかに西方に向かって傾斜するが、ほぼ平坦である。西側の高まりは、長さ約5m・幅3.5～4mの円形もしくは楕円形である。周囲の平坦部からの高さは、0.5～0.7mである。東側の高まりと相対する位置にあり、東側高まりの中央部と西側高まりの頂部とは、約4.5～5m離れている。また、西側高まり頂部の高さは、東側高まりの中央付近より約0.5m低い。二つの高まりの間は、幅約1mの鞍部となる。

西側の高まりの南北には平坦部がある。北側の平坦部は長さ約5m・幅3～3.5m、南側の平坦部は長さ3～3.5m・幅4.5～5mで、形状がやや異なる。北側平坦部の方が、やや広く感じられる。このように、製鉄作業面には平坦部があるのだが、先述した二つの高まりが大きいいため、平坦面全体が狭い印象を受ける。

平坦面下の西側～南側は斜面となるが、斜面が屈曲する辺りが大きく抉られている。平坦面西側斜面には、5～10cm大の鉄滓が散在するが、地表面観察では、斜面の南側に多く散布している。斜面が抉られている部分周辺にも鉄滓が多く観察され、土が抉られている部分の畔に生えている木の根元には、3～5cm大の小型の鉄滓が集中して堆積している。ただし、全体的に人の拳大～人頭大もあるような大型の鉄滓や炉壁片は、非常に少ない。

斜面下から西方に向かって、かなり傾斜の緩い平坦面があり、林道へと続いていく。製鉄作業に伴うものかどうかは判断できないが、何らかの地形改変が行われている可能性が考えられる。

4. 地形測量調査から見る遺跡の特徴

今回報告した鑪ヶ谷第1号製鉄遺跡は、これまでに報告した鑪ヶ谷第2号製鉄遺跡や滝谷製鉄遺跡・大草第3号製鉄遺跡とともに、小見谷川中流域付近に展開する遺跡である。また、カミショウブ第1号製鉄遺跡は、水釜迫製鉄遺跡とともに小見谷川下流域に分布する遺跡である。これらの遺跡は、小見谷川に直接面していないことや、遺跡の近くを小見谷川に注ぐ沢が流れていることが共通する。分布調査の状況から見ると、遺跡群全体を見た場合には、こうした特徴は一般的であるようで、むしろ水釜迫製鉄遺跡のように、小見谷川に直接面して立地する場合のほうが少数であると思われる。この点は、当時の製鉄場の選地の条件や、その背景を考える上で重要であり、今後より深く考察していきたい。

次に、今回報告した二遺跡の特徴について述べてみたい。

鑪ヶ谷第1号製鉄遺跡 丘陵の尾根を断面L字状にカットして平坦面をつくり出し、平坦面下の斜面に鉄滓等を廃棄するという、安芸地域に展開する中世製鉄遺跡の特徴をもつ。製鉄作業面が狭い印象を受けるが、周辺の地形の状況ともあわせて考えてみても、もともとあまり広くはなかったように思われる。残存状況があまり良好ではないため、本遺跡群中の製鉄遺跡に特徴的な、製鉄作業面に残された高まりの有無も、明確には判断しがたい。ただし、平坦面の東端部にあるやや低い高まりが、それに相当する可能性は考えられる。また、地形測量調査の結果や現地での観察では、作業場の可能性のある平坦部が南北に二ヶ所確認されることは注意しておきたい。詳細を明らかにするためには、発掘調査を行うことが必要となる。

本遺跡でとくに注目される点は、廃滓場の位置とその規模である。まず廃滓場の位置であるが、製鉄作業場と廃滓場の中心となる廃滓山とは、約16m離れている。山道で製鉄作業場から繋がる斜面とは分断されているため、一見すると、製鉄作業場と鉄滓が堆積した高まりとは、関連のないものにとらえかねない位置にある。通常、製鉄作業により排出された鉄滓は、製鉄作業場からすぐ下の斜面へ向けて廃棄されるため、遺跡でも製鉄作業面のすぐ下側の斜面から鉄滓や炉壁片が散在し、廃滓場の

中心も製鉄作業場とあまり離れない位置に形成される。本遺跡群でこれまでに調査を行った水釜迫製鉄遺跡・大草第3号製鉄遺跡・鑪ヶ谷第2号製鉄遺跡などは、すべてそのような状況であった。製鉄作業面から廃滓場の中心となる高まりまでの距離については、廃滓場がよく残っていた大草第3号製鉄遺跡や滝谷製鉄遺跡では、8m前後である(安間2016・2017)。また、北広島町内で調査された鍛原製鉄遺跡でも、製鉄遺構と廃滓場との距離は約8mであった(山縣編2010)。これらに比べて、本遺跡では製鉄作業面の下の斜面には、あまり鉄滓や炉壁片が散在しないことや、製鉄作業場と廃滓場の高まりの中心まで約16m離れているという点において、異なる様相をもっている。製鉄作業場の下側には山道が複数通されているため、山道をつくる時に斜面にあった鉄滓などは削り取られてしまった可能性もあるが、廃滓の中心部分までの距離については、やはり特徴的である。

さらに、残された廃滓場の規模も注目される。廃滓場の中心的な高まりは長さ約15m・幅8m・高さ3.5~4mであるが、通路状の部分で分断された南側も一体のものとしてとらえた場合には、長さは約21mにも及ぶ。幅も、山道で削られた部分を考慮すれば、もともとは10mを超えたものと推定される。本遺跡群のこれまでの調査で、廃滓場の高まりがよく残っていたものとしては、大草第3号製鉄遺跡A地点の長さ約14m・幅12~13m・高さ4.5~5m、B地点の長さ16~17m・幅約15m・高さ4.5~5m、滝谷製鉄遺跡の長さ約12m・幅8~9m・高さ4.5~5mなどがある(安間2016・2017)。本遺跡のものは、これらに比べて高さがやや低いものの、大きさとしては大草第3号製鉄遺跡A地点や滝谷製鉄遺跡のものと同様か大きいということになり、非常に大きな廃滓場であるということが出来る。本遺跡や滝谷製鉄遺跡は、製鉄作業面の面積はそれほど大きくないものの、大量の廃滓が残されているという点で共通する。製鉄作業によって排出された鉄滓が、遺跡にすべて残されているわけではないという点に留意しながら、製鉄作業面の大きさや製鉄炉地下構造と、残された排滓の量の関係などについても、今後検討を進めていきたい。

なお、製鉄作業面と廃滓場の位置関係からすると、本遺跡では、作業面の南側(丘陵カット面を背にして見た場合の右手側)に向けて排滓を行ったと考えられる。

カミショウブ第1号製鉄遺跡 基本的には、安芸地域に展開する中世製鉄遺跡に特徴的な立地や構造をもつといえるが、やや様相が異なる。

まず、製鉄作業面上の高まりが大きいことである。製鉄作業面に高まりをもつ遺跡は、小見谷製鉄遺跡群では多く見られるが、本遺跡では、とくに丘陵カット面下部の中央にある高まりの規模が長さ約3m・基部幅約4m・高さ約1mで、平面規模がかなり大きい。これまで調査を実施した例で見ても、水釜迫製鉄遺跡では長さ約1m・幅約1.5~2m・高さ約0.8m、大草第3号製鉄遺跡A地点では長さ約2.5m・幅約3m・高さ約0.5~0.6m、B地点では長さ約1m・幅約1~1.5m・高さ約0.5mであり、本遺跡の高まりの規模が、かなり大きいことがわかる。つぎに立地であるが、一般的には丘陵尾根に平行な斜面部の中腹付近に築かれるが、本遺跡は尾根の先端に、尾根筋に直交するかたちで立地している。三つ目は、丘陵カット面の高さが低いことである。製鉄作業面を形成するための丘陵カット面の高さは、3~3.5m程度であることが一般的であるが、本遺跡は1.5m程しかない。

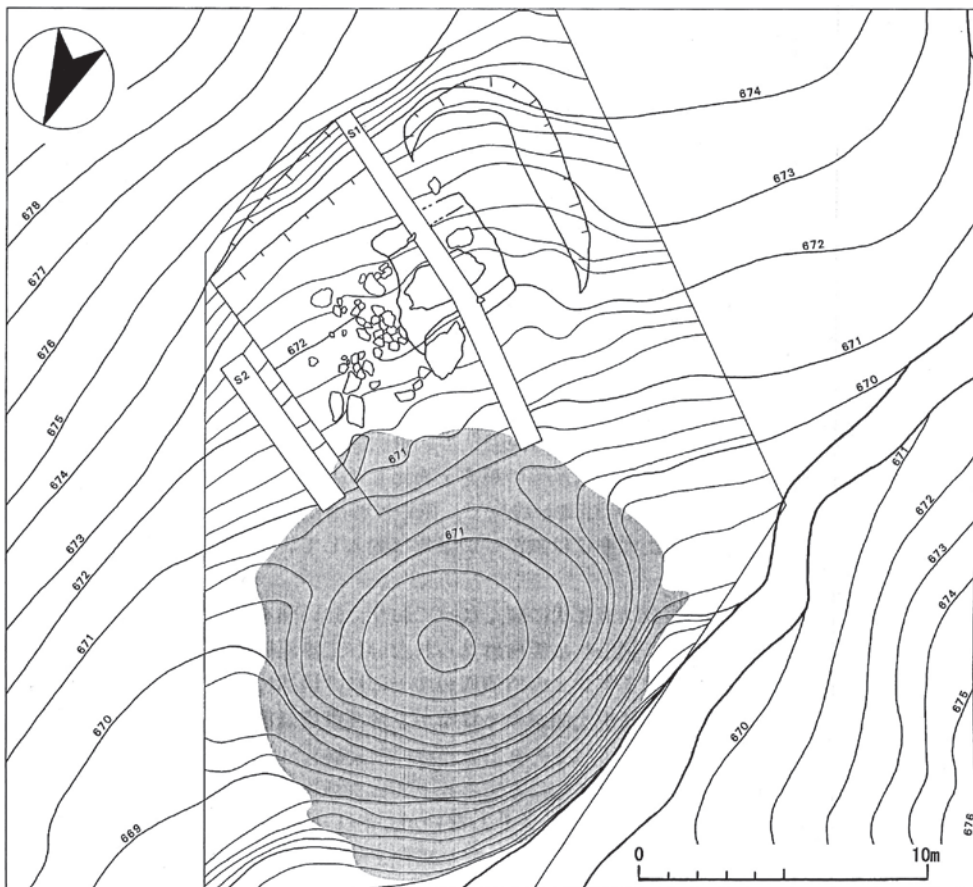
小見谷製鉄遺跡群の中で、とくに立地や丘陵カット面の状況について、このような特徴をもつ遺跡としては、平六第1号製鉄遺跡がある。平六第1号製鉄遺跡は小見谷川の西側に位置し、本遺跡よりやや北方(下流)のところで小見谷川と合流する沢を、合流点から約1.5km遡った地点に所在する。遺跡は、二本の沢の合流点に面する丘陵先端付近に立地し、製鉄作業場背後の丘陵カット面の高さも約2mと、一般的な中世製鉄遺跡より低い。平六第1号製鉄遺跡は現地踏査を行っただけであるが、遺跡の立地や構造など、本遺跡とかなり類似した特徴をもつ遺跡であると考えている。

また、芸北地域でこれまでに調査された遺跡のうち、以上のような特徴と共通した要素をもつ中世の製鉄遺跡としては、槇ヶ原製鉄遺跡(松井編1997)や鍛原製鉄遺跡(山縣編2010)がある。

横ヶ原製鉄遺跡は北広島町今吉田に、鍛原製鉄遺跡は北広島町戸谷に所在している。両遺跡ともに、丘陵斜面を断面L字状にカットして製鉄作業面をつくり出すという、安芸北部の中世製鉄遺跡と共通する構造をもつが、丘陵カット面の高さは、1.5～2m程しかなく、この点が本遺跡と類似している。

本遺跡の構造、とくに丘陵カット面の高さが低い理由については、横ヶ原製鉄遺跡や鍛原製鉄遺跡での調査成果が参考になろう。横ヶ原製鉄遺跡で検出された製鉄炉地下構造は、全長4.6m・最大幅1.1m・深さ0.45mの船底状の本床状遺構のみで構成され、小舟状遺構をもたない型式である。一方、鍛原製鉄遺跡の製鉄炉地下構造は、本床状遺構と小舟状遺構が直線状に、平行に配置されるものであるが、本床状遺構と小舟状遺構との間に土壁はもたない型式である。本床状遺構は長さ約2m・幅約1.2m・深さ約0.4mで、断面はU字形である(註1)。

このように、横ヶ原製鉄遺跡の製鉄炉地下構造は本床状遺構だけの型式であり、鍛原製鉄遺跡のものは、本床状遺構と小舟状遺構を土壁で区分するのではなく、舟底状に掘り窪めた長大な土坑に粘土を貼りつけた本床状遺構と、それに平行する直線状の小舟状遺構とで構成されている。それに対し、本床状遺構と小舟状遺構を土壁で区分する若林製鉄遺跡(河瀬編1995)や坤束製鉄遺跡(河瀬編1997)などは、高い丘陵カット面をもつ。また、北広島町阿坂に所在する矢栗製鉄遺跡(第1号炉)の製鉄炉地下構造は、鍛原製鉄遺跡同様、直線状に平行する本床状遺構と小舟状遺構で構成されているが、土壁で本床状遺構と小舟状遺構を区分しており、高い丘陵カット面をもっている(鈴木・小池



第4図 鍛原製鉄遺跡地形測量および検出遺構図(網目は排滓範囲:山縣編2010を一部改変)

1993)。こうしたことから、本床状遺構と小舟状遺構を土壁で区分しない地下構造をもつ遺跡が、本遺跡のような立地・構造をもつ可能性が考えられ、本遺跡もそうした型式の製鉄炉地下構造をもつ遺跡ではないかと推測しておきたい^(註2)。

本遺跡のこのほかの特徴としては、遺跡に残された鉄滓や炉壁片の量が少なく、その大きさも小型のものが多いということである。地形測量調査や現地での観察からすると、製鉄作業に伴って排出された鉄滓は、おもに製鉄作業場の南側（丘陵カット面を背にした場合の左手側）に廃棄されたものと考えられる。水釜迫製鉄遺跡のように、遺跡前面が道路建設などで削られてしまった場合は、遺跡にあまり鉄滓などが残されていないことは理解しやすいが、本遺跡では、そのような痕跡が明確でない。ただし、製鉄作業面下の斜面が西から南へと屈曲する部分は、斜面が大きく抉り取られている。本来であれば、この辺りが主な廃滓場であろうと推定されることから、何らかの事情で廃滓が遺跡から運び出されてしまい、現在の状況になったことは十分考えられる^(註3)。そのように考えてみると、遺跡前面（西側）が緩やかな平坦地のようにになっているのも、何らかの地形改変のためとみるのがよいであろう。

おわりに

小見谷製鉄遺跡群の調査も平成29年度で6年目を迎え、これまでに7遺跡の地形測量調査を実施した。まだ詳細の不明な点も多いものの、少しずつではあるが、遺跡群に対する知見が蓄積されてきて、特徴も明確になりつつある。とくに今回、カミショウブ第1号製鉄遺跡のような立地や構造をもつ遺跡が、小見谷製鉄遺跡群あるいは北広島地域に、ある程度分布しているという見通しが得られたことは、大きな成果である^(註4)。

夏季の調査期間中には、主に地元や県内の方々向けに、現地で調査報告会を実施している。発掘調査と違い、毎年大きな成果が出るわけではないが、それでも熱心に聴いていただいている。とくに「小見谷遺跡保存会」など、地元の方々からの調査に対する期待や関心の大きさを感じている。また、遺跡群の調査概要や歴史的な意義について、学会報告（安間2014）や学術雑誌へ投稿（安間2015b）をすることで、県内外の研究者にも遺跡群の現状や重要性が認識され、さらなる調査の進展に期待する声も寄せられるようになってきている。こうした地元の方々や、研究者の期待に少しでも応えることができるよう、今後も地道に調査を継続していきたい。

さらに現地での作業は、考古学の野外調査というだけでなく、大学生の歴史体験の場、地域文化を体感する場として貴重な役割を果たしている。こうした機会を与えていただいている北広島町教育委員会、小見谷遺跡保存会をはじめとした地元の皆様には、重ねて感謝申し上げたい。また大学当局にも、さまざまなかたちで引き続きご支援賜りたいと願っている。本調査研究を進めていくことが、学生への教育活動や関係者へのご恩返し、さらには地域貢献に繋がると信じて、今後も粘り強く活動を継続していきたい。

註

- (1) 鍛原製鉄遺跡では、製鉄遺構から約8m離れた所に径約10m・沢からの高さ約4mの廃滓山が残されており、この点も小見谷製鉄遺跡群でのあり方と共通している。
- (2) 仮定の上に仮定を重ねることになるが、本遺跡の地下構造が土壁をもたないものであり、他の遺跡は土壁をもつ型式のものであるとするならば、同一遺跡群に異なる地下構造をもつ製鉄遺跡が存在することになり、その理由や年代などを明らかにしなければならない。なお、鍛原製鉄遺跡の年

代については、製鉄炉地下構造の型式的な観点からは、中世製鉄遺跡でも相対的に古い年代のものと考えたいところである。しかし、放射性炭素による年代測定では、製鉄遺構で16世紀前半～17世紀中頃、廃滓山では15世紀末～17世紀前半の値が示されており、中世でも新しい段階に属すると考えられている。これまでの研究では、安芸北部における中世製鉄遺構の地下構造は、比較的単線的な変遷をたどって近世たたら製鉄の地下構造へと発展すると考えられてきた(上柁2007, 角田2014, 川越1997, 東山・吉川2005)。しかし、鍛原製鉄遺跡の存在は、安芸北部に展開する製鉄遺跡の構造や時期的変遷過程が決して単線的で単純なものではなく、複雑な様相をもつことを示している。その詳細については、本遺跡の発掘調査を実施することで、より具体的な状況が判明するのではないかと考えている。いずれも、今後の調査の課題としたい。

- (3) 例えば、製鉄遺跡から鉄滓を搬出して道路敷きなどに再利用したという話は、中国山地域ではよく聞かれることである。
- (4) カミショウブ第1号製鉄遺跡と類似した立地や構造をもつ平六第1号製鉄遺跡については、同じ小見谷遺跡群に所在しており、遺跡群全体の様相を考えるうえでも重要な遺跡になるものと考えている。地形測量調査などを実施して、詳細な情報を得たいところであるが、遺跡までの道程が険しく、現状では調査を実施することは困難な状況にある。しかし、いずれ何らかの方法で、調査を行いたいと考えている。

参考文献

- 安間拓巳 2014「北広島町小見谷製鉄遺跡群の調査研究」『平成26年度広島史学研究会考古部会』(研究発表および研究発表要旨)
- 安間拓巳 2015a「遺跡の調査を通じた教育活動と地域貢献」『比治山大学紀要』第21号, 比治山大学
- 安間拓巳 2015b「広島県北広島町小見谷製鉄遺跡群の現状と意義」『たたら研究』第54号, たたら研究会
- 安間拓巳 2016「広島県北広島町小見谷製鉄遺跡群の測量調査報告(1)」『比治山大学紀要』第22号, 比治山大学
- 安間拓巳 2017「広島県北広島町小見谷製鉄遺跡群の測量調査報告(2)」『比治山大学紀要』第23号, 比治山大学
- 上柁 武 2007「中国地方における中世製鉄炉地下構造の構造的特質」『たたら研究』第47号, たたら研究会
- 小都 隆 2008『吉川氏城館跡』同成社
- 角田徳幸 2014『たたら吹製鉄の成立と展開』清文堂
- 川越哲志 1997「中国地方中世製鉄炉の地下施設」『広島大学文学部紀要』第57号, 広島大学文学部
- 河瀬正利編 1995『今吉田若林遺跡発掘調査報告書』広島県山県郡豊平町教育委員会
- 河瀬正利編 1997『坤東製鉄遺跡』広島県山県郡豊平町教育委員会
- 木村信幸 2001「吉川元春館の建設と石之村」『吉川元春館跡の研究』(中世遺跡調査研究報告第2集), 広島県教育委員会
- 鈴木康之・小池伸彦 1993「矢栗製鉄遺跡」『中国地方製鉄遺跡の研究』溪水社
- 田邊英男 2007「第1章 はじめに」『吉川元春館跡整備事業報告書』広島県北広島町教育委員会
- 東山信治・吉川 正 2005「中国地方における中世製鉄遺跡の地域性」『島根考古学会誌』第22集, 島根考古学会
- 福田豊彦 1989「文献史料からみた古代・中世の製鉄」『考古学ジャーナル』313, ニュー・サイエンス社

松井和幸編 1997『槇ヶ原製鉄遺跡発掘調査報告書』（財）広島県埋蔵文化財調査センター
山縣宏爾編 2010『鍛原製鉄遺跡発掘調査報告書』広島県山県郡北広島町教育委員会

〈キーワード〉

考古学，地形測量調査，製鉄遺跡，中世地域史，地域貢献

安間 拓巳（現代文化学部言語文化学科日本語文化コース）

（2017.11.6 受理）